

「子どもの主体性を育む援助のあり方を考える」

愛隣幼稚園の保育 (2)

Study on Support for Independence of Children

— Childcare of AIRIN Kindergarten No2 —

黒田 静江¹

要旨:保育者の援助はいろいろあるが、保育の中で何を育てようとしているかによって、その方法は違ってくる。合理主義・効率主義・結果重視などの社会的風潮が、子どもの生活にも影響を及ぼし、子どもが思う存分遊ぶ時間を奪ってしまったり、効率よく教えることを重視しすぎたりしてはいないだろうか。平成22年度から23年度にかけて植草学園大学の共同研究(「障害のある子を含む保育をどう進めるか?」)に参加し、「子どもの遊びと保育者の援助」について考えてきた。「子ども一人ひとりが輝く保育」を目指している愛隣幼稚園での保育について、子どもの遊びの変化から保育者の援助について調べてきた。今回はその研究の延長として、保育者の思いや願いが、子どもの主体性を促すことに繋がっていることを実践記録から考察した。その結果子どもの傍らにいて遊びを見守ってあげることや、仲間との関係を構築できるように行う保育者の間接的援助が、子どもの主体性を促していることを再確認した。今後「保育内容演習(表現)」の授業においてどのように反映してかを検討課題としたい。

Key word : 子ども、遊び、主体性、仲間、援助

1 はじめに

幼稚園教育要領の中で、幼児教育は「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行なうこと」を基本として、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」、「遊びを通した総合的指導」や「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導」を行うようにすると明記されている。保育の場での「教育」は学校教育と異なり、乳幼児期の発達を考えると当然その方法も違ったものが求められる。子どもの将来のためにと、大人が次々にいろいろなことを教え込んでいくことは、「幼児教育」の目指していることではないと考えている。

平成22年から23年にかけて、本学の共同研究(「障害のある子を含む保育をどう進めるか?」)のために3カ月に一度くらいの割合で愛隣幼稚園(以後A幼稚園と記す)に伺わせていただいたが、

その時の記録と、4歳児の担任から寄せていただいた記録を基に「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活」を援助する保育について検討し、今後の授業改善に役立てたいと考えた。

2 目的

保育を行う際に求められることはいろいろあるが、特に子どもの発達を理解し、保育環境を整えながら、子どもの成長・発達を促す保育者の援助は、大切な専門性の一つである。筆者が、A幼稚園見学の際に見た主体的に遊ぶ子どもの姿や、4歳児の保育記録を基に保育者の援助について詳しく分析することで、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活」を援助する保育とはどのようなものか考えてみたい。また保育内容演習(表現)の授業で「子どもの主体性を促す保育」を実践できるようにするためには、どのような授

¹ 植草学園短期大学

業を行うとよいか示唆を得たい。

3 方法

平成22年度から23年度にかけて、10回ほどA幼稚園に見学に行かせていただいた。その際に関わった子どもの様子や、平成23年1学期4歳児担任からいただいた保育記録をもとに、「幼児の主體的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活」を援助する保育とはどのようなものかを考える。

4 事例と考察

(1) 援助について

前回発表した「子どもの遊びと保育者の援助—愛隣幼稚園の保育—」と同じ立場で「援助」について考えていきたい^{注1)}

まず、「援助」について、保育者の関わり方は大きく分けて2つあると考えている。ひとつは、保育者の考えた指導計画に沿って指導する場合の「援助」である。2つ目の「援助」は、子どもが主体的に遊んでいる時に、ある意図をもって保育者が関わっていく場合である。特に、子どもの発達課題を見据えながら、集団のなかで子どもの遊びが持続するために行う言葉かけや、環境設定を含めた保育者の援助の仕方が保育を行ううえで大変重要になってくる。

子どもの遊びへの関わり方や援助方法は、保育者の専門性のなかでも大切な部分であると考えているので、今回は2つ目の援助について考えたい。

(2) 事例及び考察

事例1 「自分で切った段ボールで遊びたい」

平成22年11月中旬 5歳男児

幼稚園あげての行事のために、ホールに虹のすべり台（高さ1 m10cmくらい）が作られていた。そこでは5歳児クラスの男児たち7～8名が、一枚の段ボール破片をスキーの板に見立て滑り下りる遊びをしていた。舞台の上にはたくさんの段ボールがあり、数名の子どもが、段ボールを切っていた。その中の一人であるA児も、段ボールを切り始めていた。段ボールは、カッターを動かすとペコペコと揺れてしまい、なかなか切り取れない。切りにくそうな様子を見て、筆者がA児に申し出て、ペコペコする段ボールを押さえてあげた

が、それでもほんの少しずつしか切れない。A児は皆が遊んでいる虹のすべり台の方をちらりちらりと見やりながら、ぎこちなくカッターを動かす。早く遊びたいと気持ちは焦るが、一向に切れない。

一緒に段ボールを切っていた友だちは、自分が切り取った段ボールの端切れを差し出し、「Aちゃん、これを使って遊んだらいいのに」と申し出てくれた。しかし、カッターの手を動かしながら、A児はきっぱりと「いらぬ」と言い、友だちの差し出した段ボールを見向きもしなかった。そこへB児がやってきて、手際よくスイスイと段ボールを切り取り始めた。A児はB児の側に行き、じっとカッターの使い方を見守っていた。段ボールを切り終えたB児が虹のすべり台の方へ行ってしまった後、A児は、先ほどから切りかけていた段ボールの所へ戻って来た。もう虹のすべり台の方は見えていない。A児の中では、何としても段ボールを切り落としたいという思いが、先ほどより強くなったように感じた。

切り始めてから20分前後格闘した後に、段ボールをやっと切り取ることができ、A児はすっきりと晴れ晴れした顔で勇んで虹のすべり台に駆けて行った。

【事例1の考察】

事例1のような機会を子どもから与えられ、二つのことを感じた。第一に舞台の上で段ボールを切って遊んでいる子どもたちの言葉は少なかったが、段ボールを切って滑る遊びの楽しさを感じあい、伝えあいながら遊んでいた。第二には、このように長い時間を費やしても、自分で切った段ボールで遊びたいというA児の気持ちの強さに驚いた。友だちからももらった破片で滑ることも、段ボールを押さえ続けていた筆者に切ってほしいと頼むことも十分あり得るが、A児は皆と同じように自分で切り取りたかったのである。

次に環境を通して行う保育として詳しくみると、(1) 遊び時間が保障されている (2) 虹の滑り台で遊びを楽しんでいる仲間がいる (3) 子どもでも安心して使えるカッターがある (4) 自由に使える材料（段ボール）がある、(5) やり直せる自由がある、などが考えられる。

(1) 遊び時間が保障されている

A幼稚園では、9時30分ころには全園児が登園しており、11時頃まで自由に遊んでいる。子どもたちは思い思いの場所で仲間と遊ぶ。また保育者はいろいろな場所を回って子どもたちの遊びを見守ったり、援助したり、遊びが展開するような環境設定や言葉かけを行っていた。

(2) 同じ遊びを楽しんでいる仲間がいる

A児は虹の滑り台で楽しそうに遊んでいる仲間に加わりたいが、その前に皆と同じように自力で段ボールを切りたい気持ちが強かった。「これ使うといいよ」と数人の友だちがA児に言葉をかけており、日々遊びの中で仲間との関わりが深まっていることが理解できる。このようなA児の姿から、人やモノへの関わり方やこだわりが、遊びを通して自分自身を育て、さまざまな事を学んでいることが分かった。

(3) 安心して使えるカッターがある

はさみで紙を切るのとは違い、カッターを自由に使えると遊びがダイナミックに展開できる。保育者が切って準備するのは4歳児までで、5歳児の環境は、カッターを自由に使えるよう条件を整えておくことが大切だと思った。ほとんどの子どもが、自分の力で切り取っていたこともあり、筆者はただ段ボールを押さえていただけである。援助方法として、このような場合はどこまでやると良かったのかという疑問も残った。担任であればきっとA児の発達課題が分かり、適切な援助をおこなったであろうとも考えられる。

(4) 自由に使える材料がある

この遊びは、ホールに設置された虹のすべり台と、そろそろ雪のたよりも聞こえてくる季節という環境が影響しているのではないか。また材料の段ボールは行事準備のために、子どもたちが自由に使っていたもので、何枚もステージ上に置いてあったことが、きっかけとなって遊びが生まれたと思われる。箱を折りたたんだままの段ボールや、板状のものなど大小さまざまな段ボールが置いてあった。子どもたちは、自分の切り取る段ボールをどれにするか、品定めをしてから作業を開始していた。A児も上手く切り取れないのは、段ボールが硬いためと思ったのか、一度は途中まで切っ

たが中止し、他の段ボールに変えていた。

(5) 失敗してもやり直せる自由がある

どのように切っても、失敗してやり直しても、誰からも何も言われないことは、満足するまで遊びたい時や、遊びの目標がはっきり分かっている子どもにとっては大切な条件である。

A児は、作業中はほとんど何も話さなかった。じっと手を動かしながら、自分は何ができないか、今何を楽しみたいのかという気持ちに向き合っていたように思われる。教えられたり、やってもらったりすることではなく、自分で獲得していくことが大切であると思ったので、筆者も子どもの遊びを邪魔しないようにという気持ちで見守っていた。今保育の中では教え過ぎていて、子どもが自ら格闘して自分を伸ばす機会を奪ってしまっていないだろうかと危惧している。4歳児ならば切りやすいように浅く切り込みを入れてあげることもあり得るが、5歳児はしっかりと自分で考え行動を決めることが大切だと考えている。A児には「頑張れ」とか「このようにすると上手く切れる」などと教えたりせずに、彼が選択していることを見守り、ひたすら段ボール板を持っていた。

友だちから「これ使うといいよ」と破片を差し出された時、A児は心の中で「違うよ。皆と同じように、僕は自分の力で段ボールを切り、それで遊びたいんだよ」とでも言っているようであった。上手に切っている友だちの姿を何も言わずに見つめていたA児はきっと心の中で、「うまいなあ。なぜ自分には切れないのだろうか。どのようにやるとB君のように切れるのかな」と言っていたと思う。

A児のこの姿は5歳児にふさわしい経験となり、自分とも向き合う時間となったのではないか。そして自分の力で遣りきった達成感・満足感は、それまで努力したことやじっとできない自分に向き合い、耐えた時間に比例して大きかったであろうと思う。

A児との様子を遠くから見ていた園長先生は、筆者がA児の思いを受け止め、そこにいたからこそ段ボールを自力で切り取ることができたと話してくださった。じっと受け止めること、子どもの願いを実現できるようにしてあげることが、保育の中で求められていることを実感し、学ぶことができた。

事例2「私だって跳びたい」 4歳児

平成23年2月下旬

久しぶりにバラ組（4歳児）に行くと、段ボール板で製作した雪山の背景が保育室奥の壁側にあり、室内用滑り台は白いビニールに覆われており、まるでゲレンデの雪のようであった。4～5人の男児が、ダンボールで作ったスキーを履いて、立ったまま滑り下りてくる遊びをしており、前年11月の遊び（事例1）が規模は小さいが4歳児クラスで始まっていたと考えられる。また廊下では2人の女児がフーフープで縄跳びをしていた。筆者がバラ組を覗いていたら、2人の女児が近寄ってきて「フーフープで縄跳びするから、数えて欲しい」と言ってきたので、跳んだ数を数えてあげた。2人とも8～9回くらいは跳べていた。次に女児たちは「今度は『郵便やさん』でやるから歌って」と遊びのお手伝いを頼まれた。近くでじっとその様子を見ている女児（Cちゃん）がいた。「私のことも見ていてよ」と訴えるような視線を感じた。先の女児たちの縄跳び披露が終わった頃、Cちゃんも「数えて」と言ってきた。しかし何度やっても2～3回しか跳べなかった。

担任の先生が「サーカスショーが始まりまーす」と案内を始めると、椅子がいくつか並べられ、近くにいた子どもが座った。一方ショーに出演したい子どもは、サーカス小屋の絵の後ろに次々と隠れた。「サーカスショー」は、フーフープを持った子どもたちが、自主的に一人ずつ出て来て、得意な跳び方を披露するというものであった。中盤では何とCちゃんも現れ、その顔の表情からは「自分だってやりたい、自分にもできるはず」という意欲を感じた。先ほど廊下で遊んでいた時は、数回しか跳べなかったCちゃんは、友だちや先生の前で何と9回も跳ぶことができた。

【事例2の考察】

4歳児も2月という時期になると、自分の達成目標や「こうでありたい」というような自分に対する願いがはっきりと表れていると感じた。Cちゃんのやる気が、「ショー」という場面で、自分をしっかり出し尽くし、練習ではできなかった回数を跳ぶことができたことに驚いた。子どもの底力は凄いことを教えてもらった。

2人の女児とは、初めての対面だったが、このように自分たちの遊びに手を貸してほしいと依頼してくる逞しさと、数えるだけではなく、歌いながら数えることも要求してくる発言力には感心した。歌いながら跳ぶことは以前に保育者と楽しく遊んだ経験があるから、要求してきたとも考えられる。子どもは意識していないであろうが、歌に合わせリズムを感じながら跳ぶと、たくさん跳べるようになる。2人の女児は、先に跳んだ回数とどちらがたくさん跳べたかを何回も聞いてきた。このように遊びながら、もっとたくさん跳べるようになりたいという自己目標を目指して練習していたのである。

また自分たちの練習を援助してほしい気持ちが強かったのは、ショーの前に練習の成果を確認したかったのであろう。

環境としては、(1)保育室内環境が、子どもの遊びを楽しいものになっている(2)保育者が関わりすぎしていない(3)「サーカスショー」という発表の場があることが、子どもの主体性を促すことに繋がっていると考えられる。

(1) 保育室内環境が、子どもの遊びを楽しいものになっている

A幼稚園の保育は、現実にあるものを真似たモノを環境設定しながら、子どもとともに遊びの世界を構築しており、保育者の素晴らしい感性が窺われる。子どもでなくても、バラ組の保育室を覗くと、いろいろな遊びが予想できて本当に楽しい気持ちになれる。そのような環境を生み出す保育者の方々のエネルギーが、子どもの遊ぶ力を育て、主体的な遊びを促していると考えられる。

(2) 保育者が関わりすぎしていない

「いくつ跳べるか数えているから、頑張って跳んで」などと言って頑張らせるような声かけをするだけでは、遊びは広がらない。皆に見てもらおう「ショー」をすることで、出たい子どもが張り切って練習するようになる。子どもは「ショー」があるから、皆の前で上手く跳べるようになりたいと自発的に遊んでいたのである。またショーでは、様々な工夫をして他者とは違う跳び方に挑戦している子どももいた。子どもが跳んでいる様子を見て、保育者は一人ひとりに「上手」と言うだけで

はなく、「面白い跳び方だね」「すごい技」など様々な言葉を掛けながら、ショーを楽しんでいた。

(3) 「サーカスショー」という発表の場があること

友だちの前で発表するチャンスがあることで、3人の女兒が一生懸命に縄跳びを練習していた理由が、「ショーを始めま〜す」の保育者の呼びかけで初めて理解できた。「ショー」を設定することも、主体性を促す環境の一つであり、保育の展開方法の一つである。また保育者や友だちに頑張ったことを認められながら、子どもが育つことと、このような遊びの場面を幾度か重ねながら個性が育つことを感じた。

事例3 「ミーアキャット ショー」^{注2)}

平成23年6月後半～7月 園庭 4歳女児

仲良し2人組のTちゃんとHちゃんは、園でも2人で過ごすことが多かったので、保育者は2人の世界から少し広がってほしいと願っていた。フラフープが好きな2人は、いつも得意になって遊んでいた。フラフープを回している姿が、千葉公園にいるミーアキャットに似ていたことから、「ミーアキャットショーをしよう」ということになった。2人の他には、1人で一生懸命フラフープを練習していたYちゃんがいた。Yちゃんは友だちと遊びたい気持ちはあるが、なかなか友だちと関われないでいた。是非この機会にフラフープを通して、友だちと関わってほしいと思い、TちゃんとHちゃんに声をかけ、「Yちゃんもフラフープを練習しているから、一緒にミーアキャットショーに誘ってみよう」と言うと、2人は直ぐにYちゃんのところへ行って声をかけてくれた。それから3人でそれぞれの名前を決め、その場にいる何人かの子どもたちにショーを見てほしいと声をかけてから実際にショーをやってみた。3人とも大変満足そうだったので、もっと仲間が増えるようにクラス全員の前でお知らせをすることになった。クラスでの集まりの時に3人が前に出てそれぞれ名乗ることになったが、Yちゃんだけ恥ずかしくて言えなかった。するとTちゃんが代わりに言ってくれた。お知らせをしたことで、その後遊ぶ仲間が一気に増え、カチューシャを使ってミーアキャットの耳も作った。「音楽も流してほ

しい」ということになり音楽を流すと、最初は皆で一斉にやっていたが、それでは場所が狭いことが分かり、自分たちだけで順番を決め、2人組で出てくるようになっていった。

【事例3の考察】

事例3を「子どもの遊びと保育者の援助」の関係を調べるために、子どもの遊びと保育者の援助にポイントを置いてまとめ直すと、次のようになる。

- ・子どもの様子(以下㊦と記す)：いつも2人でフラフープ遊びをしていることが多いTちゃんとHちゃん。
- ・保育者の願い(以下㊧と記す)：他の友だちとも関わることで、2人だけの世界から広がってほしい。
- ・保育者の援助(以下㊨と記す)：フラフープを得意になって回し遊んでいる2人の姿が千葉公園の「ミーアキャット」に似ていると思い、「ミーアキャットショーをしよう」と提案した。
- ・㊦：2人の他にYちゃんもフラフープを練習していた。Yちゃんは友だちと遊びたい気持ちはあるが、なかなか他の人と関われないでいた。
- ・㊧：Yちゃんも是非この機会に友だちと関わってほしい。
- ・㊨：TちゃんとHちゃんが「Yちゃんもミーアキャットショーに出よう」と誘うように提案した。
- ・㊦：誘いに応じYちゃんと3人で、それぞれの名前を決めた→近くにいた何人かの子どもにショーを見てほしいと頼み、友だちの前で実際にショーをした→3人とも大変満足そうであった。
- ・㊨：もっと大勢の友だちに見てもらってはどうかと提案した。
- ・㊦：クラスの皆の前でお知らせをすることになった→名前を言うことになった時、Yちゃんは恥ずかしくて言えなかった→Tちゃんが代わりに言ってあげた→このお知らせをしたことで、一気に遊ぶ仲間が増えた。
- ・㊨：カチューシャを使って、ミーアキャットの耳をつけた。
- ・㊦：「音楽を流してほしい」と保育者に頼んだ→音楽を聞きながら一斉に皆でフープで遊んだ

→場所が狭いことが分かり、自分たちだけで順番を決め、2人組で登場するようになった。

保育者は、きっかけをつくったり提案をするが、直接教えたり指示していない。また子どもは自分の遊び方に対するイメージや考えを持っていて、保育者に援助してほしいことをいくつか要求している。自ら気づき、展望をもちながら主体的に遊んでいるようすからは、3人は、遊びへの満足感・達成感を十分に共有できたであろう。さらに他の仲間が増え一緒に遊ぶことで、3人の遊びでは味わえないより大きな満足感や喜びを経験したことであろうことが推察できる。4歳児1学期という時期からすでに自発性や主体性を発揮し、楽しく遊んでいる4歳児の姿がたくましく感じられ、このような保育の中で、子どもたちは自らの力で学び、「生きる力」を育てていることが理解できる。子どもと保育者の間には、信頼関係が築かれており、子どもを信じている保育者のようすも目に浮かぶ。保育者が教えたり、指示したり取り仕切ったりしないで、子どものやることに共感しながら寄り添い、適切な環境を整えていることが、子どもの自発性や主体性を促しているともいえる。

5 まとめ

1 子どもの主体性を促す発表活動

(1) 子どもの主体性を促す「ショー」

事例2のなかで「ショー」を行う場面がある。遊びが盛り上がってきて、皆の前で発表させたいと保育者が思ったとき、「ショーをやってはどうか」と子どもに持ちかけたり、子ども自身が「ショーをやりたい」と申し出てきたりする。ショーを始める前に、子どもたちは「これから○でショーをやりますから、見に来てください」と園庭や隣のクラスに行き呼びかけている。時に保育者も声を掛けていた。このような光景も、ごく普通に見られる保育場面であった。子どもが自信をもって、自分の遊びをアピールし、皆に見てもらい、集団の中で、認められていくことは、主体性を促すだけでなく、個性を育て集団をも育てることに繋がっている。

(2) 遊びの輪を広げる《お知らせ》

事例3では、もっと遊び仲間が増えるようにと

皆の前でお知らせをしている。A幼稚園では、11時くらいになると、各保育室に子どもたちが戻り、保育者のお話を聞いたり、子どもたちが今やっている遊びについて発表したり、今後どのように遊びたいか皆に伝えたり、「遊びに来て」と仲間呼びかけている。皆に伝えたい気持ちがあっても、4歳児前半では言葉で伝えきれないことも多いが、保育者もその子どもの遊びを把握しているので、言葉が足りない部分を補足し援助していた。A幼稚園の保育目標の中でも「誘い合って遊ぶ」と書かれており、既に4歳児からそのことを実践していることがよく分かった。

子どもが自分の遊びを仲間伝えたり、遊びをよりおもしろくする方法を考えて伝えたりすることで、遊びに一生懸命向き合おうとし、主体性が促される。また発表を通して自分の良さ・弱点や友だちの良さを見出していく。言いかえると、多様な価値観を身につけたり、人と折り合ったり協同して動いたりする力が育まれることに繋がり、これからの社会を生きていくうえで大切な経験だと考える。

2 保育者の援助

A幼稚園では、子どもが思い思いに遊びたくなるような環境が準備されている。

保育者は、遊びを楽しく展開できるようにと直接モノを提案したり、具体的なモノを持って来たり、保育室の環境を整えて、子どもの遊びたい気持ちを盛り上げていた。環境の一部として様々な自由（時間・空間・材料の選択・やり直せる・試行錯誤できる・繰り返し・確かめるなど）があることで、保育者の間接的援助が子どもの個性を伸ばしながら集団をも育てていた。

保育者の間接的援助方法としては、子どもの思いに寄り添いながら、一人ひとりの良さを遊びの中から見つけ出し、次に、遊びをもっと面白くしたり、友だちを誘って遊べる方法を考えたりしていた。また子どもの主体性を促すような適切な言葉かけを行っていた。

このような保育環境の中でこそ、子どもが自らの力で友だちに関わっていきこうとしたり、発想力・行動力・創造性が磨かれたりするのではないかと思った。

保育終了後、保育者たちは現在の子どもの遊ぶ姿や発達課題を話し合ったり、これから予想されるその遊びの展開について、かなり時間を割いて話し合ったり製作したりし、環境設定に心を砕いていることも窺えた。

A幼稚園の保育は、教育要領にもあるように「自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」ことを踏まえ、保育者がどのような援助をすると子どもの良さが引き立ち、仲間とよい関わりを持てるのかにあった。そして「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導」を行っていた。

6 おわりに

「保育内容演習 表現」の授業において、今までは「子どもの主体性を促す」、「子どもの感じ方

や考え方を受けとめた指導を考える」というテーマで表現課題を行ってきたが、今回の研究を基に子どもの良さを見つけ出したり、仲間にアピールしたり、仲間を誘って遊びを広げていく保育の展開についても検討したい。

参考文献

- 1) 鯨岡 峻 2010年「保育・主体として育てる営み」 ミネルヴァ書房
- 2) 大場牧夫 1996年「表現原論」萌文書林

引用

- ※1) 「子どもの遊びと保育者の援助
—愛隣幼稚園の保育—」
平成24年2月18日発表自書レポートより
- ※2) 事例3 愛隣幼稚園教諭 矢内 球一